



ポーランド楽派を聴く ～ショパンとルトスワフスキ～ (2013年10月15日開催) を企画して



昨2013年はポーランドの生んだ秀でた作曲家
ヴィトルト・ルトスワフスキの生誕100周年でした。
これを記念して、ポーランド広報文化センターの
支援を受け、ルトスワフスキ研究の第一人者でワ
ルシャワ大学教授のズヴィグニェフ・スコヴロン氏
を迎えて講演と演奏の集いを企画しました。

ルトスワフスキはポーランド国内だけでなく、世
界的にも戦後の現代音楽を代表する素晴らしい
作曲家ですが、札幌では認知度はあまり高くあり
ません。お客様が集まるのかと不安でしたが、幸
いスコヴロン教授は、2012年に日本で翻訳が出
版された『ショパン全書簡 1816-1831年』(岩波
書店)の編集にも関わられたショパン研究者でも
あり、2012年には東京でその書簡集について講
演を行い、大変素晴らしい内容だったと聞きました。
そこで前半はショパン書簡集をめぐるスコヴロ
ン教授と当協会会員の三浦洋氏の対談=写真1=、
後半はスコヴロン先生にルトスワフスキについて
の講演をお願いしました。

また当協会の会員の中には素晴らしい音楽家
が多数いらっしゃいますので、前半にショパン、
後半にルトスワフスキ作品の演奏を加えて=写真2
=「ポーランド楽派を聴く」と銘打ったレクチャーコ
ンサートとしました。

会場は札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホ
ールをお借りしました。当協会でするのは初めて
でしたが、二階天井まで吹き抜けで音響が素晴
らしく、お客様との距離も近く、とても親密な雰
囲気で、講演と演奏には打ってつけでした。

当日は、前後半ともに筆者がポーランド語から通
訳をしました。当日まではとても緊張しましたが、ス
コヴロン先生に実際にお会いすると、非常に深み
のある内容を平易なことばで情熱を持って語られ、
まるで音楽についての優れた書物の朗読を聴い
ているようで、非常に理解し易く、ホッとしました。



写真1 (対談)三浦氏(左)とスコヴロン氏(右)

前半はポーランド、日本を代表するショパン研
究者の対談とあって、とても刺激的でした。スコヴ
ロン先生は、ショパンの書簡の原本は紛失したも
のが多く非常に苦勞していること、編集には現在
フランスで刊行中のジョルジュ・サンド書簡集の編
集方針を参考にしていることなどを語られました。
三浦氏からの、書簡集の編集によりスコヴロン先
生のショパン像は変わったかという質問に対して、
先生は、ショパン像に変化はないが、当時の歴史
・社会背景を知ることによってショパンに対する理解が
深まったこと、特にショパンは作曲家としては歴史
上初めて近代的教育制度の恩恵を受け、大学で
文学や哲学などの一般教養を学んだことの重要
性を強調されました。

この書簡集は全3巻で、出版されたのはまだ1
巻目のみですが、現在編集中の2巻目は次のショ
パンコンクールが行われる2015年、3巻目はその
次のショパンコンクールがある2020年に出版を目
指しているそうです。

つづいて当協会会員の松井亜樹さんのソプラノ
と、高橋健一郎さんのピアノ伴奏で、ショパンの歌
曲「いとしい人」ほか、坂田朋優さんのピアノで「バ
ラード第3番」が演奏されました。スコヴロン先生
は、札幌で聴くショパン作品を堪能された様子で、



イベント後に「演奏のレベルの高さに非常に感銘を受けた」とおっしゃっていました。

後半はルトスワフスキについての講演です。今回の日本講演旅行では、札幌以外はすべて英語原稿で、札幌のために英語からポーランド語に訳し直されたそうです。事前にいただいた原稿は、通訳なしでも90分はかかる力作でしたが、後半は通訳、演奏を入れて50分で、話されたかったことの半分もお話しいただけず、全体の構成、時間配分など、企画には多くの反省点が残りました。

講演では、スコヴロン先生は、ルトスワフスキ作品の抜粋をCDで紹介しながら、彼の創作活動の発展について解説されました。調性音楽に代わる音楽言語を探求したこと、1956年のハンガリーにおける反共産主義運動の影響で、この時期はポーランドでも文化政策が緩和化し、それがルトスワフスキをはじめペンデレツキやグレツキなど（「ポーランド楽派」と呼ばれる）優れた音楽家を生んだこと、当時流行していた「偶然性の音楽」という理念から、ルトスワフスキは「管理された偶然性」という独自の作曲技法を生み出し、それは決められた時間の範囲内で、決められた音の高さを保ちながら、自由なリズムで演奏するという手法であったことなどを、非常に印象深く話されました。

ルトスワフスキ作品の演奏では、前半に引き続き松井亜樹さんと高橋健一郎さんがユリアン・トゥヴィムの詩による歌曲を2曲演奏しました。

また当協会会員、昭和音楽大学教授でピアニストの川染雅嗣氏が東京から駆けつけ「ポーランドの民謡風メロディ」の演奏を聞かせてくださいました。川染先生はポーランド留学中にルトスワフスキ

自身の演奏を聴かれたことがあるそうです。本場で研鑽を積まれた先生の、ポーランド音楽やルトスワフスキに対する深い理解に基づいた演奏に、会場全体が魅了されました。

最後に会場の札幌大谷大学のピアノ科主任教授で、当協会会員のピアニスト谷本聡子氏とクラリネットの菊地秀夫氏により「舞踏前奏曲」が演奏されました。複雑なリズムの難曲を、曲の魅力を最大限に伝えながら見事に演奏しきる熱演でした。

講演の最後にスコヴロン先生は、ルトスワフスキを含め現代音楽を私たちが理解する方法について、非常に印象深いことを述べられました。現代音楽は外国語の学習のようなもので、最初は何の意味も持たない音声の流れにしか聞こえないが、文法や語彙を習得するにつれ、徐々に意味が理解できるというのです。現代音楽も、その作曲技法、構成などの知識を得て接すると、はじめて理解に達すると強調されました。音楽の聴き手の側にもそれを受け容れるための準備が必要であるという考えには、非常に共感できました。

ルトスワフスキというなじみの薄い作曲家に関するイベントにもかかわらず、当日は約80名の方が会場に足を運んでくださいました。ご来場いただいたお客様、スコヴロン先生、三浦先生、演奏者の皆さま、そして当日お手伝いいただいたスタッフのみなさんに、感謝の念でいっぱいです。本当にありがとうございました。

佐光 伸一（「W.ルトスワフスキ生誕100周年記念講演&演奏会」実行委員）

※当日配布資料をご希望の方は事務局(1ページ目左上参照)にお問い合わせください。

ズビグニェフ・スコヴロン教授を迎えてヴィトルト・ルトスワフスキ生誕100周年記念講演&演奏会



写真2 演奏者（左から）川染雅嗣 高橋健一郎 菊地秀夫 坂田朋優 谷本聡子 松井亜樹の各氏
札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホールにて